

試行錯誤

別冊代わりに読む人

5

鉦脈を掘りあてる

un poco / 代わりに読む人

巻頭言 脈脈を掘りあてる 友田とん

4

スズキナオ 谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する

7

吉野で柚子を一つもらう

取材で幾度となく訪ねていた吉野へ、紅葉見物に行く。その直前に「吉野葛」を読んだ著者には、紅葉を眺めるほかに目的があった……。訪ねた土地の人々との会話が魅力的。著者も読者も「吉野葛」に取り込まれていくような不思議な感覚に陥ります。

わかしよ文庫 大関の書いた小説を探して

23

伊勢ノ濱、復活なるか？

百年以上も前に活躍した大関・伊勢ノ濱が趣味で小説を書いていたことを知った著者は、近くの古本屋から都内へと探偵のようにその小説の行方を追いかける。

(「大相撲観戦記」より改題)

伏見瞬 蓮實重彦論

蓮實重彦の「運動」をあらためて考える

35

蓮實を論じる際に重要なのは「表層」よりも「運動」であり、運動を伝える鍵となるのは言葉の「リズム」「律動」であると著者は考える。では、蓮實は運動をどう捉えているか。『スポーツ批評宣言』『ハリウッド映画史講義』を参照しながら、蓮實にとつての運動を明らかにしていく。

友田とん 取るに足らないものを取る

50

なんなら副産物狙いでも

地下鉄の漏水対策、皇室献上桃詐欺事件、読むと肩こりが治る小説などなど、『試行錯誤』を通じて、くつきりと浮かび上がってきた興味の対象をブレインストーミングのように次々と綴っていく。

鉾脈を掘りあてる 友田とん

ある本屋さんからの言葉が気になっていた。

「友田さんが、なんのために『試行錯誤』を続けて出しているのか、伝わってないんじゃないですか？」

過去の巻頭言に、試行錯誤の、あるいはそれを継続することの大切さは書いてきた。たとえ過去に誰かが見つけたものであったとしても、再発見することには意味があるということにも触れてきた。それを読むことで、そうした過程を追体験することもまた読者にとって有効であるに違いない。それでも、書く人が自分ひとりで発表できてしまう時代にあえてこうした試行錯誤を束ねた冊子を発行していることの意味をもう少し伝えておかなければいけない。

寄稿するひとりひとりが試行錯誤し、定期的に発表を続けていくことのできる場を作るというのが当初の考えで、それは今も変わっていない。そこから出来上がっていくつづきを私が読みたいと願う人に適当なテーマで書いてもらっている。もち

ろん、実際に書いているのは著者にほかならないが、そこでは編者である私が著者と原稿のやりとりという共同作業を行うことが一つの肝になっている。というのも、私自身、『百年の孤独』を代わりに読む』を発表してしばらくしエントの松井祐輔さんから依頼をもらって、『HABノ冊子』という非常に自由な場所で「本屋に行く」というエッセイを季節ごとに書いてきたし、その松井さんとの共同作業で私は私の鉾脈を見つけてきたという強い思いがあるからだ。ひとりで書いていたなら、興味や書くものも同じあたりにとどまっていた可能性が高い。

私は寄稿者に一つのテーマを追究するなかで、鉾脈を掘りあててほしいと、ある時期以降伝えてきた。そのテーマが興味の手紙ではないとはいえ、長い期間にわたってあるテーマを追究し、継続的に文章を書いていけば、自分がなぜそのテーマに惹かれるのかという根源にやがて触れるだろうし、自分こそが書くべくして書くものにも出会うだろう。私はそれを鉾脈と呼んでいる。そして、それによって書き進められた文章が読む者に何某かの作用を及ぼさないはずがないという確信があるからだ。

メルマガ時代から数えれば2年以上が過ぎ、今回わかしよ文庫さんは「鉾脈」を発見したと歓喜している。私もとてもうれしい。だから、いよいよここからなのだ。

あらためて言う。自分ひとりできてしまう時代である。さまざまなプラットフォームが用意され、著者自身が自分で書いたものを、Webで公開したり、印刷製本した冊子として、販売し読者に届けることさえできる環境がすでに整っている。そして、独立書店の存在がある。私自身、作った冊子を本屋さんに置いてもらってきた。この何年もの間、店それぞれの刻々と変化していく本の選択や並びそれ自体に、新しい「雑誌的」な姿を見出してもきた。だから、それぞれの著者の書いた文章を、あえて途中に編者が入り、冊子として束ね固定しまうことは、そうしたその場所の持つフレキシブルな並べ方の可能性に逆らうことかもしれない。それでも、私自身は、同じ時期にどのような試行錯誤があり、何が書かれていたのかということとを、束ねてアーカイブしておきたいのだと思う。

このように、今私はメディアとしての継続可能なあり方の結論に辿り着いているわけではない。どちらかと言えば、そういう存在でありたいという希望をもとにして、ただどこかにあると信じられる鉱脈の予感によってこの冊子を出している。

谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する

スズキナオ

第三回 吉野で柚子を一つもらう

睡眠導入剤のように落語を聴くという人は多いそうだ。たとえばYouTubeには、名だたる落語家たちの嘶が「睡眠用落語」というタイトルをつけてアップされていたりする。そのような聴かれ方をすることを、当の落語家たちがどう思うかはわからないが、私も最近、後藤明生の文学講義の音声聴きながらよく眠るから、その「効能」の方はわかる気がする。

後藤明生は1932年に生まれて1999年まで生きた作家で、私は、もうだいぶ前だが、一時期夢中になって立て続けに小説を読んだ。『首塚の上のアドバルーン』とか『挟み撃ち』とか、なんだか言葉にし難い面白さがあった。また読み返したい。

後藤明生の文学講義の音声をCD化したものがあり、そこで題材に取り上げられているのが谷崎潤一郎の『吉野葛』という小説であると知って購入したのは、割と最近のことである。「アーリーバード・ブックス」という、後藤明生の過去の作品を電子書籍化して販売している出版プロジェクトがあつて（その代表の松崎元子さんは後藤明生の娘さんだそう）、そこで作られたCDが、前編・後編の2枚に分けて販売されている。

収録されている音声は、1982年4月30日、NHK文化センターで行われた講義でのものだという。通販で買い、届いたCDをいつも使っているパソコンに取り込んで再生したら、1曲目は後藤明生の声をサンプリングして切り貼りしたテクノみたいなトラックで驚く。1分に満たないその曲が唐突に終わり、2曲目が講義の音声となっている。前編と後編、それぞれ1時間ほどある。

後藤明生の声を初めて聴いた。「まあ、これはあの、あれなんですわね、まあ小説として、あの、まあ、非常にその、単純と言えば非常に単純な小説なんですわね、作り方として。ところがあの、考えようによつてはその、まったくその、手の込んだついでなんですわね。こう、複雑ついでいうのとはまたちょっと違うんだけど、非常に手の込んだまあ、凝つたと言いますわね、そういう作り方してるんですわね。うーん」と、ゆつくりと立ち上がるように講義は始まり、全体が六章で構成される『吉野葛』の、前編のCDでは「その一」から「その三」までを、後編では「その四」から「その六」までを読み解いていく。

だいたい横になりながら聴いているものだから（パソコンの音楽プレイヤーで再生し、枕元に置いた小型スピーカーから音を出している）、いつも私は途中で寝てしまう。退屈だから寝てしまうなどという意味ではない。後藤明生が、谷崎潤一郎の小説を読

大関の書いた小説を探して

〔大相撲観戦記〕より改題

わかしよ文庫

第2回

伊勢ノ濱、復活なるか？

前回の「大関の書いた小説を探して」で、およそ110年前の大関の伊勢ノ濱が趣味で小説を書いていて雑誌にも発表していたらしいと書いたところ、反響があったとともに、このことについて誰に話しても反応がよかったため、わたしは内心ではこれを「鉾脈」と呼び悦に入っていた。時おり思い出しているにやにやと不敵な笑みを浮かべることさえあった。一方、気がかりなのは手がかりの無さだった。国会図書館で見つけられないのであれば、無理かもしれないという気もしていた(100円ショップで言われるとされる言葉、「そこになければいいですね」を連想)。

素人が適当に調べたところで簡単に見つかるものではない気がする。ある程度「あたり」をつけたほうがよさそうだ。というわけでまずは、伊勢ノ濱の経歴を表にしてみる。

1883 (明治16) 年11月 (0歳) 出生
1902 (明治35) 年11月 (18歳) 初土俵
1905 (明治38) 年5月 (21歳) 新十両昇進

1906 (明治39) 年5月 (22歳) 新入幕、この頃から素行悪化
1907 (明治40) 年1月 (23歳) 脱走、その後丸坊主にして改心
1909 (明治42) 年6月 (25歳) 小結昇進
1910 (明治43) 年6月 (26歳) 関脇昇進
1911 (明治44) 年6月 (27歳) 「小説道楽」として取材を受けた『名流百道楽』が刊行される

1913 (大正2) 年5月 (29歳) 大関昇進
1919 (大正8) 年1月 (35歳) 引退、年寄中立を襲名なみだち
1928 (昭和3) 年5月 (44歳) 静岡県沼津市の旅館で服毒自殺

こうして年表にしてみると、人生のあつけなさというかさみしさが際立つ。それはそれとして、亡くなったときの遺品から原稿用紙が見つかったのであれば死の間際まで書いていただろうし、現役時代は稽古に本場所に巡業に、と小説なんて書く暇がなかったはずだから、次のような仮説を立てた。

蓮實重彦論

伏見
瞬

第五回 蓮實重彦の「運動」をあらためて考える

1. 仏検2回落ちた

蓮實重彦論の締め切りをだいぶ長く（一か月以上）破ってしまいました。これには色々な原因が考えられるんですが、大きなファクターとして、「11月に受けた仏検に落ちた」があります。2023年の夏に仏検2級には受かったのですが、冬の準一級には落ちました。準一級は一年に一度しか試験が行われないので、次の試験には必ず受かるよう一年かけてじっくり勉強したつもりでした。勉強のために、フローベール『三つの物語』の原文と蓮實訳文をノートに書き続ける作業をほぼ毎日続けました。蓮實のフランス語教科書『フランス語の余白に』には、「外国語学習にはとにかく書き続けるしかない」と書かれていたので、書き続けました。最後の一、二か月で、準一級の過去問を参考にしながら勉強しました。その結果の、二度目の不合格。「とにかく書き続ける」学習方法が、少なくとも私が仏検に受かるためには効果を持たなかったことが明らかになりました。

落ち込みました。時間をかけて結果がでなかったので、徒労感を覚えました。仏検の後も『三つの物語』をノートに書き続ける作業は続けるつもりでした。書き続

けるだけでなく、わからない単語や文法も調べながら進めていこうと。しかし、そうすると時間はさらにかかってしまいます。年末年始はほかの仕事も忙しい。二か月近く、写経作業はなおざりになっています。蓮實重彦への向き合い方を見失ってしまい、忙しさのなかで時間が過ぎていきます。

2. Twitter(X)での会話

さすがにこれではまずかろうと、年末年始に蓮實重彦の読んでいなかった本を読み始めました。読んだ本の一つが『スポーツ批評宣言 あるいは運動の擁護』です。おお。やっぱ面白い。野球やサッカーを生で、球場で、グラウンドで見たくなる。蓮實重彦の批評の中心はここで書かれた文章にあると思わされる読書体験でした。

ほぼ同じタイミングで、三浦光彦「他性的知覚と誤認の能力——映画の分析（不）可能性をめぐる」を読みました。この文章には蓮實への有効な批判が含まれていると聞いたので、掲載されている『表象18』を買って読んでみました。すると翌日、タイミングよくいぬのせなか座の山本浩貴さんと、三浦さん本人がこの論文にTwitterで言及していました。

取るに足らないものを取る

友田とん

第五回 なんなら副産物狙いでも

このリトルプレス『試行錯誤』（とその前身であるメルマガ「思考錯誤」）では「取るに足らないものを取る」というエッセイを書いてきた。日常において、たいていの人が気にも留めないようなものをあえて取り、思考してみることの面白さを書こうと試みてきた。それ以前から、ナンセンスな問いを立てることで、日常や文学に可笑しさを見つげるようなエッセイをあきもせずには繰り返して書いていた。もうかれこれ十年になる。

やっていること自体はあまり変わらないし、同じようなことを繰り返しているように見えるかもしれない。だが、月日が経てば、やはり興味の対象は変わる。また逆に、自分では別々のものへの興味だと思っていたものが、ある一つのキーワードで括れると後から気付かされることもある。

この1〜2年というのは、この『試行錯誤』を通じて、私の興味というものがどういうものに向いているかというのが、よりくつきりと浮かび上がってきた時間だった。

本稿では、そうした浮かび上がってきた興味をひとまず整理して、今後取り組み、書いていきたいと考えていることを纏めておきたい。

地下鉄の漏水対策

この二年ほど、いちばん時間を費やしていたのは、「地下鉄の漏水対策」についてのフィールドワークと、それを文章にまとめることだ。2018年ごろに急に気になり出して以来、地下鉄を利用するたびに観察し写真におさめていたのだが、私がかどこに面白さを感じているのかを、文章にまとめていくうちに、「手に負えない」ものへの興味であることに気づいていった。つまりそれは、人が対処しつづけることで、なんとか維持されているものへの興味、インフラの維持とそれを支える人々への興味だった。社会の基盤でありながら、なかなか光が当たらない部分だと思う。考えてみたら、会社員時代もIT関係の仕事をしながら、興味はアプリケーションよりも常にプラットフォームに行きがちであったし、大学院で研究していた時も最初からそうしようという意図があったわけではないのに、気づけば純粹数学へと向かって行った。

そうした自分の興味の共通性を意識しながら、「地下鉄の漏水対策」という社会の至るところに存在する「手に負えない」ものへの向き合い方を模索してきた。その過程と成果は、しばらく前からまとめる作業に入っていて、今年の近い時期に読んでもらえると思う。

皇室献上桃詐欺事件

もう一つ、気になっていたのが、2023年の夏に報じられた皇室献上桃詐欺事件だ。農業コンサルタントを名乗る男が、福島県内の桃農家を訪ね、農家が育てている桃を皇室に献上したので譲ってほしいと言って騙し取ったとされる事件である。桃農家に「皇室献上桃の地」と書かれた木札が届けられたり、「美智子様」が作られたという大福が届けられたとも記事にはあった。詐欺行為については適切に処分がなされるべきだと思うし、被害に遭われた農家の方を気の毒に思う。おそらく、そうした詐欺事件が今後起きないように、制度の見直しなどが行われるだろう。だが、むしろ気になったのは、どうして人はこうした偽者に騙されてしまうのかということだった。美智子様のつくったという大福が届けられた農家の方は、食べてしまうのはもったいないと言って神棚に供えたとされる。見ず知らずの者を怪しんだようには思えず、むしろ進んで騙されようとしているとは言わないまでも、権